



鉦 都 は 祝 祭 の 夢 を 見 る

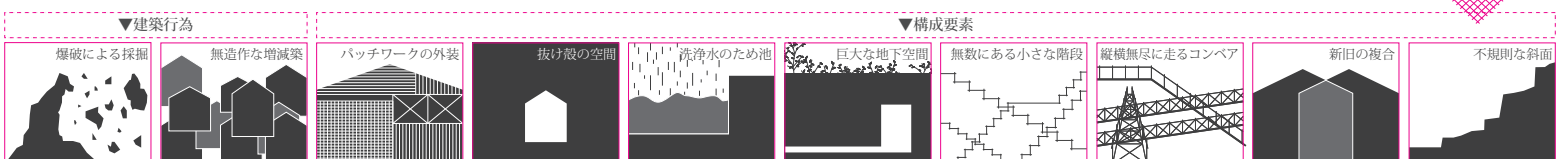
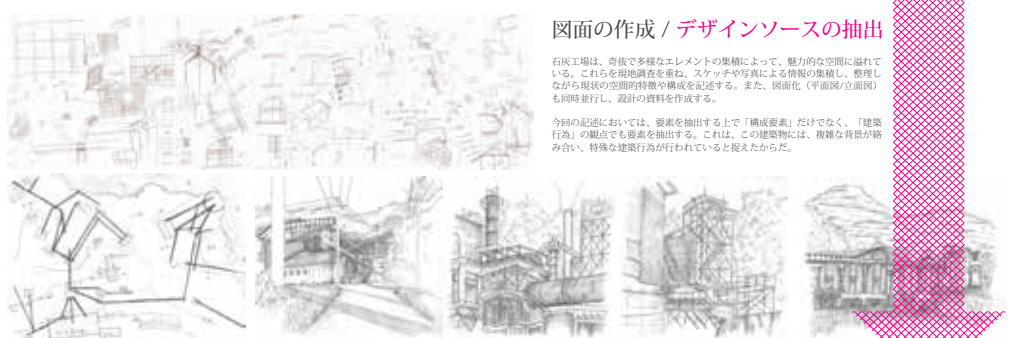
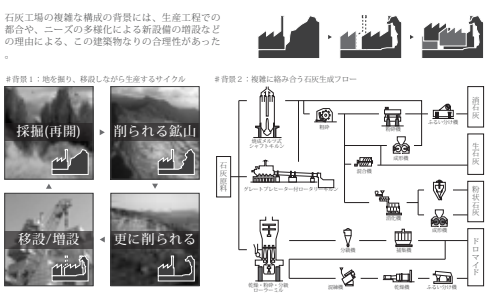
Lime city dream festivity

舞台は**鉦都**・栃木県佐野市葛生。この私の故郷には、衰退する故郷の「**悲鳴**」と石灰工場の「**ダイナマイト音**」が響く。
本研究はこの「2つの声」を軸に、石灰工場を核とした鉦都の再構築案を提案することで、故郷の再活性化を目指す。

I Notation MICRO 極端に複雑な石灰工場の構成、背景についての記述 ▶ デザインソースの抽出



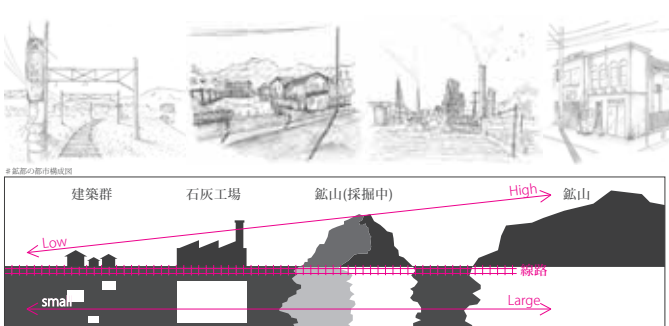
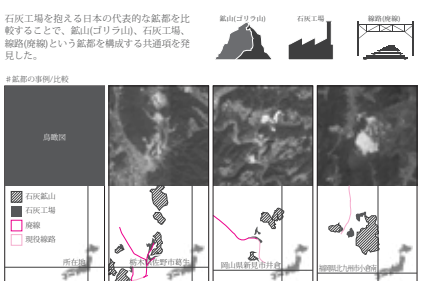
無造作な増減築の繰り返しによる複雑な空間と合理性



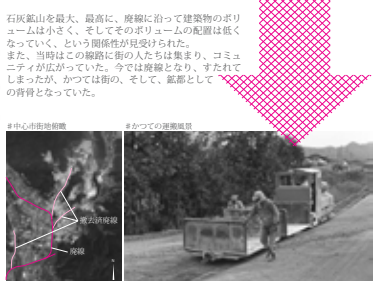
II Notation MACRO 石灰工場が都市構成に及ぼした影響についての記述 ▶ 「廃線」の位置付け



鉦都を構成する鉦山 / 石灰工場 / 線路(廃線)



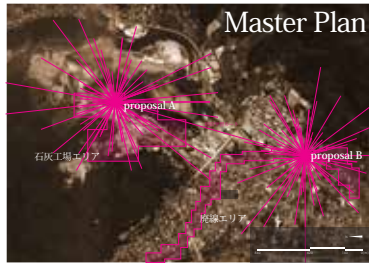
鉦都の背骨 / 風景の起点



Program -教育-



Master Plan



Proposal A



Proposal B



宿泊学習の場として解放し、街の活性化を図る

この町の骨格とも言える「石灰工場」と「廃線」を計画対象とする。

歴史性や空間体験に溢れる
石灰工場を
社会を学ぶの場に

街の背骨として営みのあった
 廃線を
 生活を学ぶの場に



しかし、双方の規模は巨大で設計する上で限界があるため、具体的な設計は範囲をトリミングし、2つのモデルを提示する。

また、教育というプログラムをこの2つに纏わせ、ここを訪れた子供達がこの街を巡りながら歴史や生活を学び、同時に街の活性化を図る。

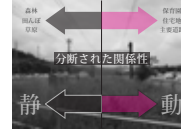
危険を回避し、学びを助長する空間

石灰工場には何気なく歩くだけでも楽しめる空間があるが、そこにはダンプカーが石灰運搬のために行き来し、常に気を配らなくてはならないという危険が隣り合わせにある。子供達や一般市民に開放するためには、そんな危険を回避しながら、隙間を縫うように、空間を体験できる配慮、設計が必要であると考えた。



分断された関係性を紡ぐ半屋外空間

この場所には線路が通っていた丘と送電線という鉱都ならではの記憶の痕跡が残っているが、丘は生活と自然を分断しているのが現状である。テントのように、フレキシブルに変体する半外部空間を積極的に活用することで、環境を生かしながら、断絶された環境を紡いでいく。



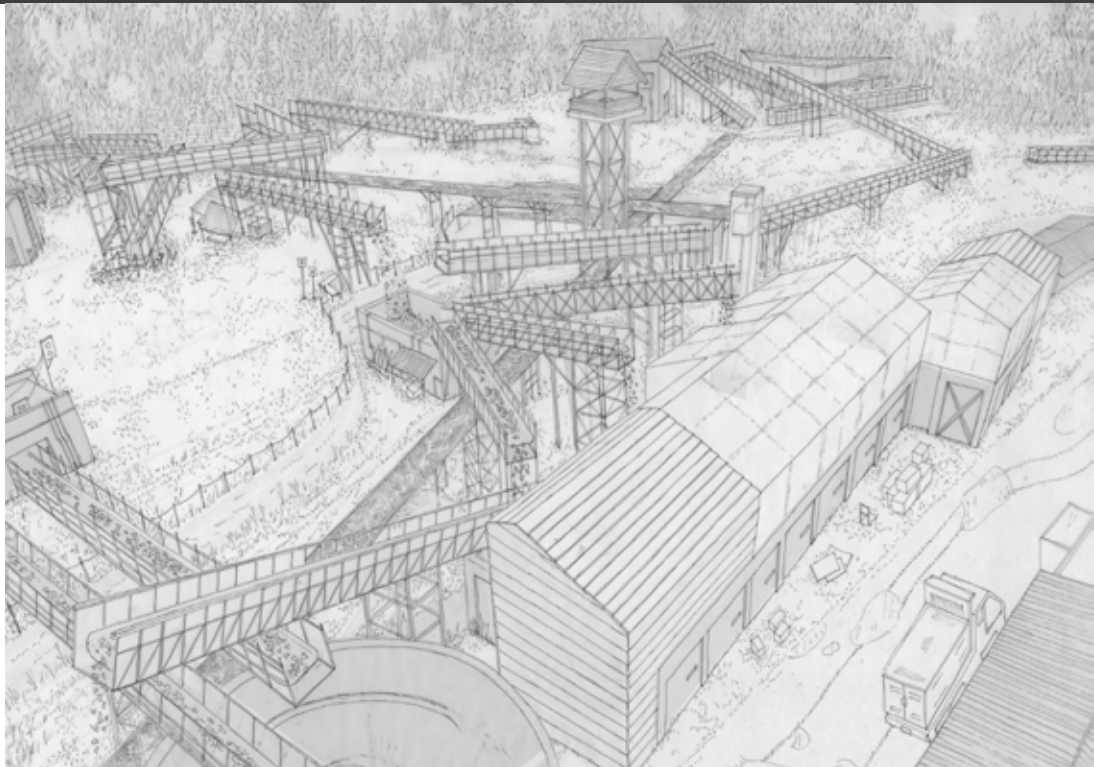
IV Proposal A

秘密基地を冒険するように楽しみながら、社会や歴史を学ぶ学校の提案

Proposal A：石灰工場の学校

2本の道 と 5つの建築 / 要素の交配

工場内に、学びや体験を助長するための「2本の道」と「5つの建築」を挿入する。安全を確保しつつ、既存空間をくぐったり、またいだり、様々な空間に回り合わせ、散らばった「5つの建築」と接続する役割を果たす。建築は活動の交点にある展望台を中心に教室、多目的室、食堂、資料館がそれぞれの場所で、擬態するように様々なカタチで空間と関係を持ちながら立ち振舞う。現状の環境は維持しつつも、工場特有の空間を余すことなく体感し、学べる学校となる。



V Proposal B

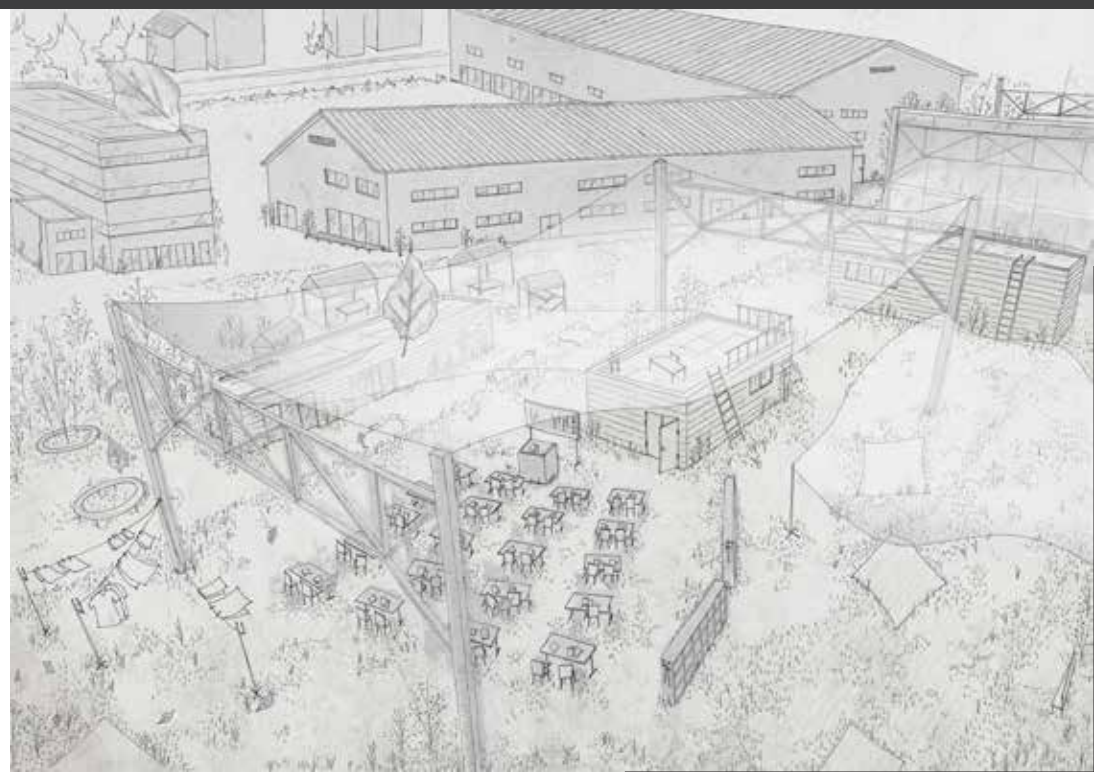
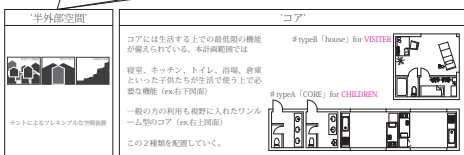
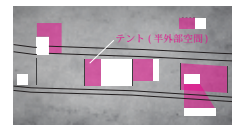
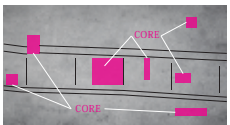
柔らかな屋根の下で子供たちは駆け回りながら、生活を学ぶ宿泊施設の提案

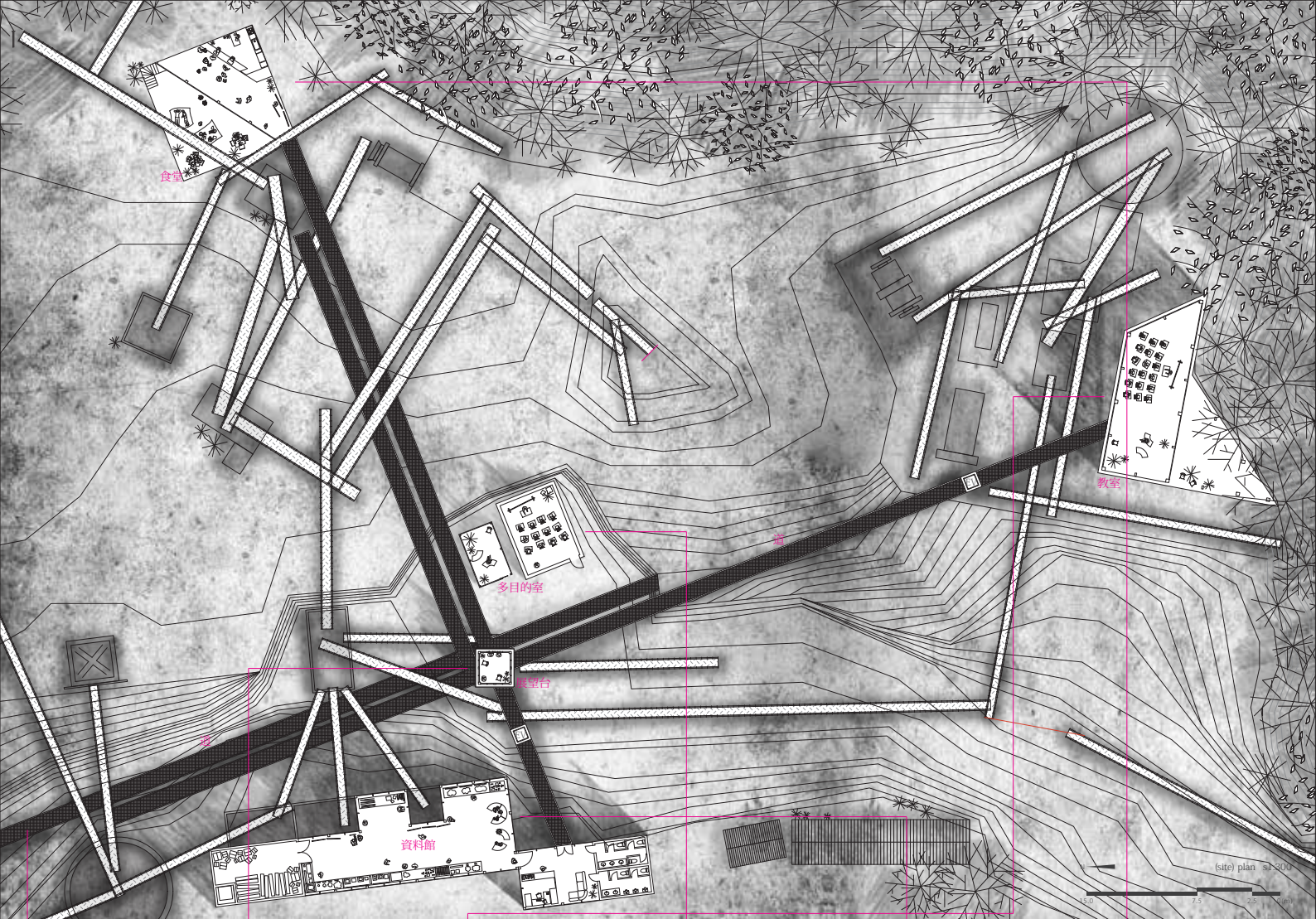
Proposal B：廃線の宿泊施設

フレキシブルに空間を創出できる場 / 要素の交配

散りばめられたコアには生活する上での最低限の機能が備えられており、そのコアをベースに、周辺環境を利用しながらテントを張ることで領域を拡張し、生活空間を広げていく。そんな空間装置を鉱部の宿泊施設として提案する。

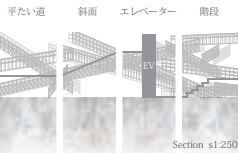
また抽出した要素群を、取捨選択しながら場所に適した解法を創っていく。石灰工場のエッセンスを纏った建築が、周辺環境を馴染みながら立ち振舞う。



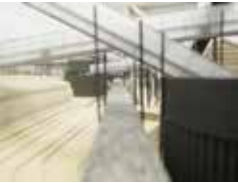


空間と出会う「2本の道」

安全を確保し、既存空間を体験できる2本の軸を考えた。構造については可能な限り既存のコンクリートと柱を共有し、負担を分け合いながら自立する。

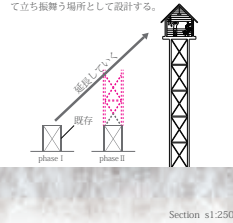


Section s1:250

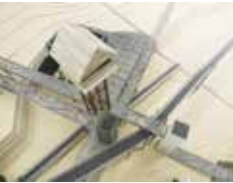


シンボルとしての「展望台」

既存の柱を延長し、工場（学校）全体が見渡せる場所として、また、この工場のランドマークとして立ち振舞う場所として設計する。

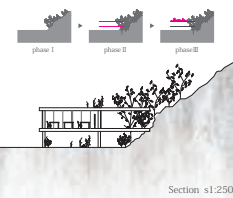


Section s1:250



余白に佇む閑静な「教室」

教室はコンベア群と山の間に余白に、斜面に逆らわず建築を配置し、屋上緑化を行うことで、自然との調和を図る。

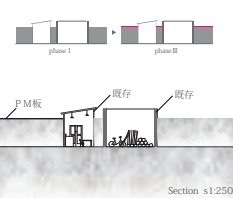


Section s1:250



両極の空間を持つ多目的室

多目的室は両極となった空間を構造補強し、空間を継承、再利用する。マテリアルも厚みも異なる空間のコントラストが、様々な用途に対応する。

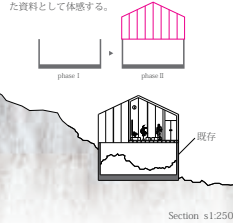


Section s1:250



生きた資料を学ぶ「資料館」

資料館は既存の上に増築し、建て増しが繰り返される石炭工場の変遷を体現した。既存設備を生きた資料として体感する。

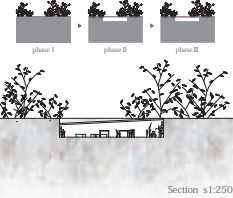


Section s1:250

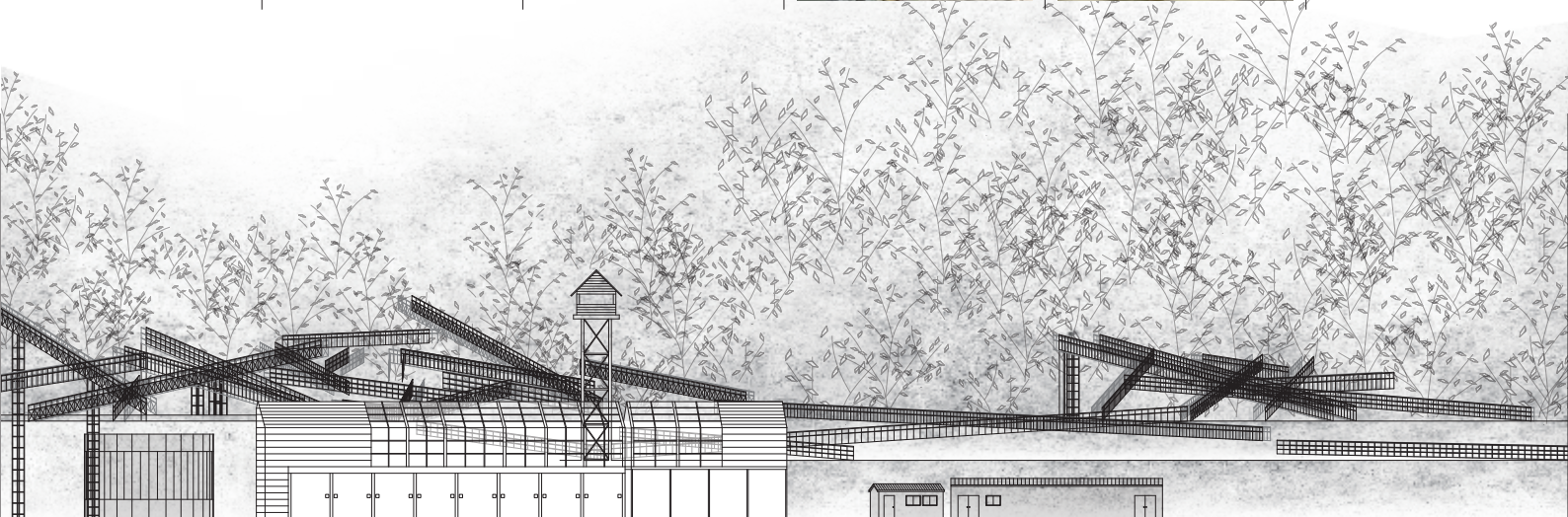


緩やかに切り離された「食堂」

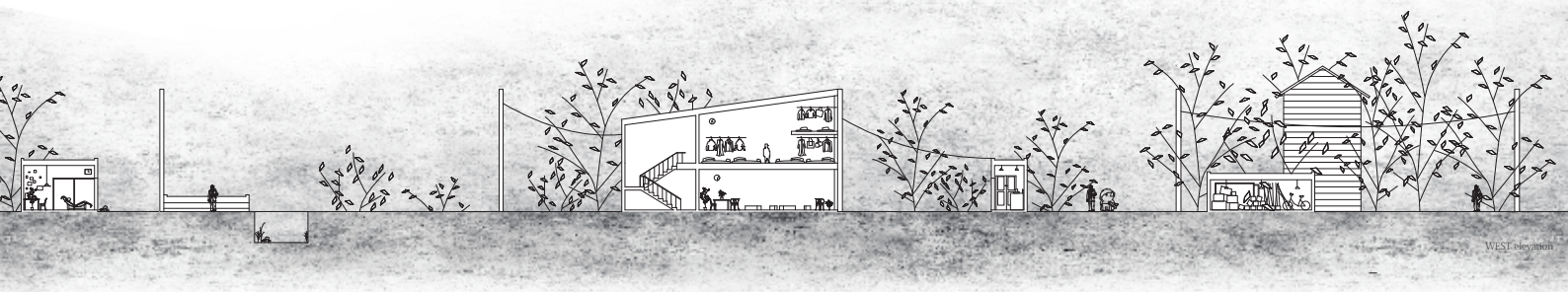
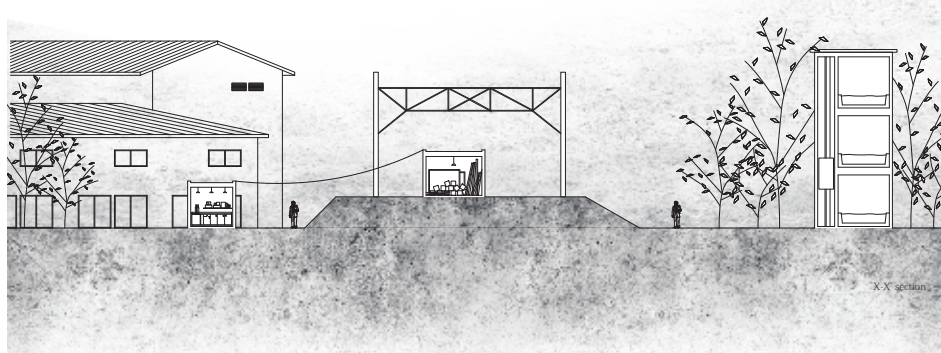
道と連続した地下空間に食堂を設けることで、セミプライベートな空間が生まれ、工場を見ながら落ち着くことのできる憩いの場となる。



Section s1:250



WEST elevation s1-300



最後に

以上のように鉦都の再構築を試みた。様々な場所で窮地に立たされている「鉦都」だが、そこには多種多様なポテンシャルに溢れており、扱いによっては一転して有益な資産になり得た。

始めに悲鳴と言ったが、修士研究を終えて、鉦都が「声」高らかに自らの姿を誇れる日が来ると、今では確信している。

